

令和 3 年度 【 学園研究費助成金 < B > 】 研究成果報告書

学部名 文化情報学部

フリガナ ミヤシタ トアリ
氏名 宮下 十有

研究期間 令和 3 年度

研究課題名 児童の表現活動とものづくりのワークショップと教材開発—専門家・学生との協働実践研究を交えて—

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	宮下十有	文化情報学部	准教授
研究分担者	亀井美穂子	文化情報学部	准教授
研究分担者	鳥居隆司	文化情報学部	教授
研究分担者	楊 寧	文化情報学部	講師

1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

本研究は、ものづくりと表現活動の WS と教材開発を行う。これまでも研究組織構成員らによって教材開発をおこなってきた。これに新たに、現代音楽家・メディアアーティストの日栄真一氏の協力と本学部学生との協働により、サウンド、メディアアート要素を取り入れた WS・教材の企画・開発・実践することとした。

研究のベースは、これまでのフィールドでもあるアフタースクールやワークショップギャザリングなど対面ワークショップを想定、実施した。また、コロナ禍での制約された環境下での、従来の教材の見直しと改善した WS 開発と実践、表現・ものづくりを支援する学びの環境づくりにも取り組むこととした。

2. 研究の推進方策 (300 字程度で記述)

研究の推進にあたって、ワークショッププログラムのリサーチ、教材の選定、専門家、教員、学生の協働の場の確保と、教材開発の検証可能な場の設定を進めた。スケジュールは以下のように進めた。2021 年 4 月-2022 年 2 月：コロナ禍における児童の表現活動の環境づくりに関するリサーチ。2021 年 5 月：小牧こども未来館でワークショップのリサーチ。同 7 月：日栄真一氏と学生との協働による、Little Bits SYNTH KIT を使ったサウンドアート・メディアアートの WS 実施。同 9-10 月：ゼミ活動での学生夏季休業中のワークショップを再検討とワークショップの改善プログラムの実施。10 月-12 月：アフタースクールでのプログラム実施と観察・検討。11 月：ワークショップギャザリングでの学生と協働ワークショップの実施・振り返り 2022 年 2 月：評価・成果発表。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

本研究では、学生、教員と専門家によるワークショップ開発にあたり、ワークショップの実施の協同を試みとして、KORG社のリトルビッツ(LittleBits)シンセキット(Synth Kit)を用いた電子楽器制作ワークショップの開発と実践をおこなった。

2021年度5月のワークショップのリサーチに基づき、2021年7月に電子音楽・メディアアーティストで電子楽器のワークショップの経験豊富な専門家である日栄氏による電子楽器ワークショップを学生に対して実施した。その後、ワークショップに参加した教員と学生によるワークショップのリフレクションや、意見聴取、ワークショップでの学生の関わりを模索しつつ、附属小学校のアフタースクールでの試行を実施し、実際の教材開発を進めた。11月のワークショップギャザリングにおいて「音をつくろう」と銘打ってプログラムを実施した。当日は日栄氏のサポートを得て、教員も学生もファシリテーターとしてワークショップを実施した。

のちに、学生や参加者の観察や当事者の振り返りから、検証を行なった。最終的なワークショップの参加者は、簡単なリズムマシンを作ることで、自分が発する「音」をじっくり聴き、発表をしていたことが観察された。リズムマシンまで制作しなくても、持ってきたフィギュアの「声」の表現に楽器を用いたりすることで、豊かな表現活動を支援することができたと考えられる。また学生は、「音のワークショップ」に参加者として楽しさを実感し、同様のワークショップをリフレクションしながら検証し、ワークショップギャザリングの実践においてもサポーターとして何度も学ぶ機会を提供した。繰り返しの経験で理解を深めることで、学生がワークショップのファシリテーターにも挑戦できるマインドが醸成されることがわかった。一方で、学生だけのワークショップの実施には難しさ実感することも明らかになった。学生自身が安心してワークショップに関与し挑戦できる場づくりを進める上で、専門家による知識と経験の補償、教員のサポート、ともに学ぶ場の形成が重要であることがわかった。

4. キーワード (本研究のキーワードを1項目以上8項目以内で記載)

①ワークショップ	②電子楽器	③ものづくり	④専門家との協働
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

学会発表：

宮下 十有・亀井 美穂子・日栄 一真・鳥居 隆司・楊 寧「学生、教員と専門家の協同によるワークショップ開発の試み-littleBitsによる電子楽器ワークショップの開発と実践から」 2021年度日本教育メディア学会第2回研究会 (オンライン) 2022年2月27日